事例No.	3683
公表年度	R7
団体の属性	一般市
団体名	福井県鯖江市

事例区分	地域活性化

タグ	・関係人口 ・人材確保・育成 ・少子化・人口減少

事例種類	地域活性化

事例内容・タイトル

鯖江市地域活性化プランコンテストによる若者の参画と地域創造

出典

地方自治研究機構　先進事例調査研究（令和7年度）

鯖江市地域活性化プランコンテストによる若者の参画と地域創造

取組のあらまし

取 組 団 体　福井県鯖江市

取 組 内 容　鯖江市地域活性化プランコンテストの実施により、若者（主に大学生・高校生）が市民との対話や現地調査を通じてプランを練り、地域課題の解決や理想のまちづくりプランを提案。地域の活性化と担い手育成を同時に図る取組。

推 進 体 制　２名（令和７年度）

予　算　等　1,200 千円（令和７年度）

1　福井県鯖江市の概要

人　　口	68,302 人	令和７年１月１日現在（住民基本台帳人口）
職 員 数	412 人	令和７年４月１日現在（一般行政部門）
総 面 積	84.59 ㎢	令和７年７月１日現在（国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」）

図表　1　福井県鯖江市の位置図

出所：Map-It マップ・イットで作成

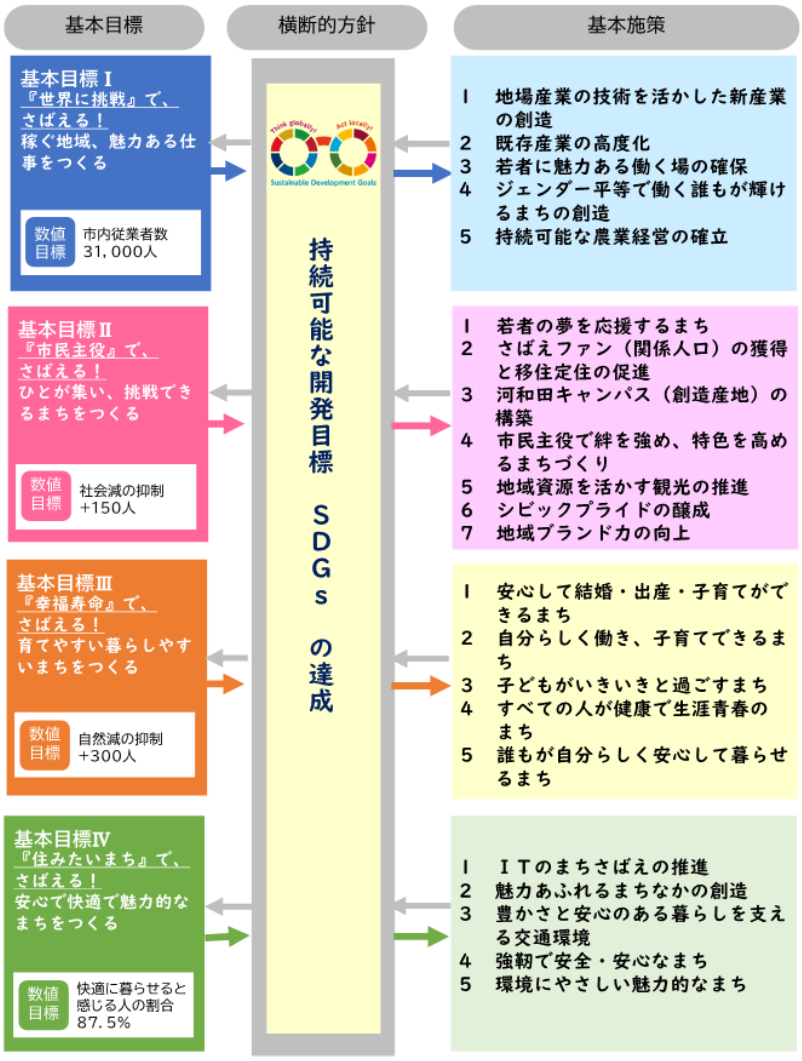
2　取組の背景・目的

(1) 人口減少と若者流出への対応方針

福井県鯖江市は、福井県嶺北地方の中央部に位置しており、「めがねのまち」として全国的に知られるとともに、繊維や漆器といった伝統産業を有している。しかし、市内に大学が立地していないことから、進学期を迎えた若者の多くが、市外へ流出し、そのまま定住等するという課題を抱えてきた。「第 2 期鯖江市まち・ひと・しごと創生総合戦略」や「鯖江市デジタル田園都市構想総合戦略」においても、若者を中心とした県外転出超過が人口減少の大きな要因であることが指摘されている。

こうした状況を踏まえ、若者の定着に加え、外部の人々とのつながりを増やすことが地域の持続可能性に不可欠とされており、市外・県外からの学生や社会人がフィールドワークや事業を通じて地域と関わる仕組みを構築することで、新たな担い手を呼び込み、地域活力を維持していくことが、重要であると考えられている。

図表　2　鯖江市デジタル田園都市構想総合戦略



出所：鯖江市ホームページ

（2）取組開始のきっかけと目的

ア 立ち上げの経緯

こうした背景の下、大学のない鯖江市において若者が地域と接点を持つ機会を創出し、人口減少や若者流出といった課題に対応することを目的として、2008 年に始まった全国的にも先駆的な取組が、「鯖江市地域活性化プランコンテスト」である。

立ち上げの契機は、NPO 法人エル・コミュニティ理事長の竹部美樹氏が地元に戻り、当時の鯖江市長に「若者がまちづくりを自分事として考えられる仕組みをつくりたい」と提案したことに始まる。竹部氏は、市長とブログでつながっていたことをきっかけに、地域イベントでの出会いを経て直接提案を行い、わずか３か月後には第１回コンテストの開催を成功させた。

竹部氏が提示した「市長をやりませんか？」というキャッチコピーは、「まちづくりを自分事として考えて欲しい」という趣旨で作成されたもので、単なる市長の疑似体験ではなく、「まちづくりを自分の言葉で語り、責任をもって構想する」という実践的な意味が込められている。参加者は、理想のまちの姿を想像し、その実現のために何が必要かを自ら考える。まさに「現状からの改善」ではなく「未来からの逆算」で発想する、未来創造型のコンテストとして位置づけられている。

図表 ３　鯖江市地域活性化プランコンテスト「市長をやりませんか？」

出所：鯖江市地域活性化プランコンテストホームページ

イ 取組開始の目的

本コンテストの目的は、大学のない鯖江市に若者が集い、地域と直接つながる機会を創出することで、人口減少や若者流出といった喫緊の課題に対応する点にあった。市民や行政だけでは得にくい斬新な発想を外部の学生から引き出し、それを地域活性化や政策形成

に生かすことが狙いとされた。また、市民が「まちづくりは自分事である」という意識を育むことを意図しており、学生・市民・行政が協働することで持続可能な地域経営を進める姿を目指した。こうした目的のもと、コンテストは単なるアイデア募集の場にとどまらず、若者を中心に地域の未来を主体的に構想する実践的な学びと協働の場として位置づけられている。

ウ 若者の自由な発想によるまちづくりの再構築

本取組により、まちづくりへのアプローチが、従来の「地域課題に対する対応型の政策立案」ではなく、「理想の未来を描く」ことを重視した未来創造型の取組へと進化した。若者が市長を疑似体験し、どのようなまちをつくりたいか、どのような政策が必要かを自ら構想するプロセスは、既成概念にとらわれない発想の広がりをもたらすことが期待された。

３　取組内容

(1) プログラム構成

本コンテストは毎年９月に２泊３日の合宿形式で行われる。実行委員会は４月に立ち上がり、８月中旬には、竹部氏による面談で応募者の適性を見極め、３人程度のチームを編成する。単独応募も受け付けており、グループを超えた多様な出会いを促進している。

事前学習として、市の歴史や産業構造、社会課題に関する情報を共有するほか、過去の提案を参考にした学びの機会も設けられる。市内の本山誠照寺が拠点とされ、地域と学生が交流できる環境づくりが重視されていることも、本コンテストの特徴である。合宿初日には市内の商店街や企業、市民へのヒアリングを通じて地域を理解する。２日目には、課題や未来像を議論し、夜には中間報告会を実施。メンターや過去の参加者からのフィードバックを受け、提案の実現可能性を高める。最終日にはプラン発表会が開かれ、10 分間のプレゼンと５分間の質疑応答を実施する。発表には必ず「スキット（寸劇)」を取り入れるなど、創造的な発想を重視している。

(2) 運営体制

主催は実行委員会であり、地元学生団体「with」のメンバーが運営の中心を担う。with は当初大学生のみで構成されていたが、活動を見て興味を持った高校生も加わり、現在は約 20～30 名規模で活動している。営業、広報、参加者サポート、当日の運営などを担い、メンバー自身がまちづくりを実践的に学ぶ場となっている。実行委員長は例年女性メンバーが務め、審査員に必ず女性が加わることも特徴である。

また、行政は支援役に徹し、広報や市内調査の同行など、ヒアリングに対する協力を行う。審査員については、鯖江市長や鯖江商工会議所会頭、福井信用金庫理事長らが参画し、地域を挙げて若者を支える体制を築いている。

図表 ４　学生団体 with

出所：学生団体 with ホームページ

(3) 財源と協賛

初期は市からの補助はなかったが、平成 23 年に「提案型市民主役事業化制度」が発足して以降は、当該制度による市の委託金と、企業協賛金を併用して実施している。協賛企業としては、鯖江商工会議所や福井信用金庫が継続的に支援しており、協賛金獲得のための営業は学生団体 with が自ら行う。

(4) 提案のフォローアップ

コンテストでの提案は「誰が実現するかを固定しない」方式をとっている。“提案”という位置付けであるため、市職員や民間団体、個人など、その提案を実現させたい人が引き継ぎ、主体的に事業化を進める。市の職員が発表会を視察していることや、市役所内で提案が共有されていることもあり、魅力ある提案は市の施策に反映されることもある。内容によっては、年度内に実現に至る例も少なくない。

４　成果・課題

(1) 実現事例と社会的効果

ア 具体的な実現事例

・えきライブラリーtetote

鯖江駅２階の未利用空間をリノベーションし、学生・市民が交流する文化拠点として再生。NPO 法人「小さな種・こころ」が運営している、読書と食事と交流が一体となった新しい公共空間である。令和７年６月７日に鯖江駅１階へ移転し、リニューアルオープンした。

・眼鏡ギネスプロジェクト

眼鏡フレームを鎖のようにつなげる「世界最長の眼鏡チェーン」に挑戦。ギネス世界記録を樹立し、「めがねのまち鯖江」のブランド力を高めた。

・めがねフェス

第２回コンテストの提案が発端。鯖江商工会議所が中心となり、眼鏡協会や商店街が協力。初期は小規模な「めがねまつり」として始まり、現在では全国から来場者を集める大規模イベントへと発展している。

図表 ５　えきライブラリーtetote

出所：鯖江市ホームページ

図表 ６　めがねフェス

出所：めがねフェスホームページ

イ 社会的効果

コンテストの継続により、「若者の意見を受け入れるまち」という文化が鯖江市に根づいたことが最大の成果である。学生の自由な提案が行政施策や地域活動に反映されることで、市民が若者を肯定的に受け入れる雰囲気が醸成されている。また、学生参加者の中には中央省庁やコンサルタント業界に進む者も多く、コンテストを通じた人材のネットワークが全国に広がっている。

さらに、地域住民がコンテスト中の食事を提供したり、参加者の関係者が地域おこし協力隊として関わったりするなど、市民参加の輪が拡大しており、市民・行政・学生が一体となるまちづくりの好循環が形成されている。

（2）課題と今後の展望

ア 課題

「未来創造型」のコンテストであるがゆえに、自由度の高い提案の中で「実現可能性」をどのように確保するかが常に問われている。中間報告会でのメンターから受けた鋭い助言を提案に反映させることで、実現可能性を高めていることから、経験豊富なメンターを確保し続けることも需要である。

イ 今後の展望

18 年間にわたり取組を継続する中で、「おとな版地域活性化プランコンテスト」など新たな派生事業も生まれた。今後はこの土壌を次世代に引き継ぐため、2024 年度から小中学生を対象とした「ドリーム・チャレンジ事業」を開始。地域の未来を担う子どもたちが「鯖江っていいな」と思える体験を通じて、まちへの誇りと愛着を育む取組として注目を集めている。

こうした活動は、若者の定着や関係人口の拡大のみならず、市民の主体性を高める地域文化の形成に寄与している。今後も、「若者の挑戦を受け入れるまち・鯖江」として、全国に先駆けた共創型まちづくりを発信し続けていくことが期待されている。

関連・参考資料

鯖江市地域活性化プランコンテスト
https://sabae-plancontest.jp/
第 2 期鯖江市まち・ひと・しごと創生総合戦略
https://www.city.sabae.fukui.jp/about_city/kekaku_torikumi/kakushukeikaku/sogosenryaku/soseisogosenryaku.html
NPO 法人エル・コミュニティ
https://www.l-community.com/
学生団体 with
https://with-sabae.com/
Forbes JAPAN
https://forbesjapan.com/articles/detail/20344/
新・公民連携最前線「自治体トップが語る」
https://project.nikkeibp.co.jp/atclppp/PPP/433746/031600029/
めがねフェス
https://meganefes.com/stage/sid4328/
市町村アカデミー「アカデミア 154 号」
https://www.jamp.gr.jp/issue/academia/vol154/